

CHIHOUKISHI HANS NO JYUNAN

地方騎士のハンス受難

4

AMARA
アマラ

主な登場人物 Main Characters

ケンイチ

一人目の日本人。
農業高校出身で、
凶悪な魔獣を手懐ける
能力を持つ、
粋なりーゼント男。
北海道出身。

キョウジ

二人目の日本人。
オタクで気弱な
性格の高校生だが、
どんな怪我でも
回復させる魔法が使える。
東京都出身。

コウシロウ

四人目の日本人。
元極道にして千里眼の
能力を持つ料理人。
静岡県出身。

ムツキ

六人目の日本人。
火・水・風・土の四つの
魔法を操る、ちょっとオタクな
お騒がせ魔法少女。
埼玉県出身。

ハンス

本編の主人公。
都では「魔術師殺し」の異名を
誇る凄腕騎士団長だったが、
貴族間での政争に背を向け、
自ら辺境の地方騎士に志願する。

レイン

ハンスを異常なまでに慕う
元部下の女騎士。普段は
仮面のような無表情だが、
実際は感情の浮き沈みが
激しい。

イツカ

五人目の日本人。ダンジョンマスター
として無生物にあらゆる機能を
付与できる。酒豪。鳥取県出身。

ミツバ

三人目の日本人。外見は可愛い
美少女だが、大食い&怪力が自慢の
トラブルメーカー。島根県出身。

ナナナ

新たにトリップして来た7人目の日本人。
様々な便利アイテムがポイントで買える
不思議なカタログを持つ。???出身。

1 視察に来た男

春祭りも過ぎ去り、季節はすっかり夏へ移り変わっていた。気温も日に日に上がり、何もせずとも汗ばむ陽気が続いている。

そんなうだる暑さのある日、ケンイチの牧場にある従業員食堂にイツカの姿があった。

普段はスウェットつぽいラフな恰好で牧場中を徘徊しているイツカだったが、その日は珍しくパリツとした服装をしていた。

ノリの利いたジャケットに、揃いのパンツ。

白シャツと、落ち着いた柄のネクタイ。

いつもはザンバラにしている髪の毛を後ろで一つに結わえた姿は、まるでやり手のOLのように見えた。手鏡で髪の毛やネクタイなどをさっとチェックすると、イツカは満足そうに頷く。

「ま、こんなもんでしょ」

「おー」

そんなイツカの様子を眺めていたキョウジが、感心した声を上げる。

牧場の従業員寮で生活している者にとって、この食堂は共用の居間のような扱いになっている。

キョウジの反応に気を良くしたのか、イツカはにやりと笑う。

「キマッてるでしょ？」

「たしかにキマッてますけど。よくそんなもの用意できましたね」

「作ってもらったのよ。型紙とかは自前だけど」

この世界にスーツのようなものがあるのか定かではないが、少なくとも彼らが暮らしている地方には存在していなかった。

となれば当然、今イツカが着ているのは自前で作ったものに違いない。

だが、自ら型紙を用意するとは驚きだ。

そのためには、少なからず専門的な知識や経験が必要なはずである。

「イツカさん、そんなことできたんですね。裁縫とか絶対無理そうに見えますけど」

「女子力低いつて言いたいのかしらこの野郎。まあ、つっても自分で習おうと思っただんじやなくて、覚えさせられたんだけどね。親戚にテーラーやってるのがいてさ。無理やりバイトさせられたの」

「テーラー!? 紳士服の仕立て屋さんですか!？」

「そーよ。手伝われたの」

そういった技術は、簡単に習得できるものではない。

少なくとも、バイトレベルに要求される仕事ではないだろう。

「いろいろやっってたんですね」

「やらされてたのよ。花屋とかやったときもあつてさあ。あれつて意外と重労働だから腰痛くなるつたら」

「うわ、凄く似合わない」

「うっせ！ この食堂のお花を生けているのは、誰と心得るかこのバカチンが」

食堂のテーブルの幾つかにはフラワーアレンジメントめいた生け花が置かれているのだが、実はすべてイツカの手によるものだった。

見た目によらず、イツカは地味に様々な分野に特技を持つ系女子だった。

「ていうか、なんでそんなかつこうしてるんです？」

「なんでつて。今日、ダンジョンの視察の日でしょ？」

この日は、ロックハンマー侯爵領主館から派遣された調査官が、イツカのダンジョンへ視察に訪れることになっていた。

春祭りの一件で捕らえられたムツキのための牢獄や、最近設置された新しいトラップの確認をするためだ。

ゴーレムやトラップを作るなど、イツカの能力はとにかく汎用性が広く、大きな危険がともなうそこで、ムツキの牢獄が正式に設置されたのを機に、定期的に視察を受けることになったのだ。

どんなものがあるのか、どんな活動をしているのか。

ロックハンマー侯爵側としても危険性などを把握しておきたいところだろう。

イツカも、自分には危険や反抗心はないとアピールできる絶好の機会だ。すべて包み隠さず見てもらい信用が得られるなら、万々歳である。

「午後からでしたっけ？」

「そう、今日の午後から。視察は今回が初めてだからね。気合いを入れないと」
何事もはじめが肝心、という訳で、イツカはスーツを新しく作ったのである。

「そのために作ったんですか、それ」

「そうそう。やっぱりこういふときはスーツでしょ？ 公の場に立つときの嗜みたしなっていうか。礼儀っていうか、万国共通っていうか。スーツは戦闘服、みたいなところあるじゃない？」

「確かに、それはありますよね。正装ってわけじゃないですけど、勝負服ってイメージはありますし。まあ、その服装が大事なお客を迎える際のきちんとした服装だつて通じるか分かりませんが」

「へ？ なんで？」

不思議そうな顔をするイツカに、キョウジは肩を竦すくめて言葉を続ける。

「だって、この地方、スーツないわけですし」

イツカは僅わずかに眉を顰ひそめた。顎あごに手をやり暫く考えると、真剣な様子で顔を上げる。

「しまった、そうだった。どうしよう」

「まあ。ピシツとした印象は与えるでしょうし。いいんじゃないありません？」

呆れたように笑いながらも、フォローを欠かさないキョウジであった。

ところで――。

ハンス達の暮らす街には、大型の宿泊施設がない。

それゆえ、ムツキを監視するために街に派遣された兵士達は、ケンイチの牧場の従業員寮で寝泊まりをしていた。苦肉の策だが、どうせ監視対象のムツキは牧場に居るので、かえって都合がいい。

ケンイチの「大は小を兼ねる」という考え方から、従業員寮はやたらと大きく作られている。

空き室もまだまだあるため、兵士達が泊まっても余裕があるのだ。

今回派遣されてきた視察官も、従業員寮に宿泊していた。

その頃、件の視察官が泊まっている部屋の前に立ち、ハンスは疲れたような溜め息を吐く。
半歩後ろに立っていたレインが、気遣わしげに声をかけた。

「どうかしましたか？」

「いや。何でこうなってるのか、と思つてな。俺はただの地方騎士で、本来なら田舎いなかに引っ込んで余生を過ごしているだけのはずだったんだがなあ」

「ずいぶん今更なことですね」

「未練たらしいと思うかもしれないが、俺にとつては大問題なんだよ」

ハンスの元に『にほんじん』という妙な能力を持った連中がやって来てから、もう随分時間が経った。

ケンイチ、キョウジ、ミツバ、コウシロウ、イツカ、ムツキ。

彼らにハンスは、どれだけ振り回されたことか。

地方の田舎町に引っ込んで、生家の目の敵にならず平々凡々と生きていくはずだったのだ。

「それが、何でこんなことに」

「案外、それがハンス様の能力、なのかも知れません」

不思議そうに眉を顰めるハンスに、レインは普段ほとんど動かさない眉を少しだけ上げてみせた。

「厄介事を呼び込む能力」

「勘弁願いたいな。心底要らんぞ、そんなもの」

そんな能力ないだろうとは思うものの、ハンスは完全に否定できなかった。

今までの『にほんじん』の常識の逸脱っぷりは、そう思わせるに足るものだったからだ。

もしか、本当に自分にはそんな力があるのではないだろうか。

そのせいで生家から疎まれ、戦争では厄介事ばかりに当たり、それらから逃れるために必死でこ

こまで来たのにもかかわらず、また厄介事に出くわしているのでは？

被害妄想としか言えない考えを、ハンスは頭を振って追い出した。

あなたが妄想だけは言えないところが恐ろしいが、今はそれよりも目の前のことをどうにかしなければならぬのだ。

「まったく、隣国といい『にほんじん』といい。厄介事だらけだな」

隣国とは、ハンスの国と隣り合う国の中でも、この街にある国境と接する国を指している。

ハンス達の国が先だつての戦争で勝利して以降、お互いの関係は落ち着いてはいた。

当然、あれやこれやと嫌がらせや謀報合戦は続いていたのだが、それは隣り合う国同士であれば当たり前のものである。

だが、そんな両国間の関係が、最近俄かにきな臭くなり始めているのだ。

なんでも、隣国に行ったハンスの国の外交官が突然、隣国に有利になるように動き出したとか。戦争で負けて縮小したはずの軍隊が、拡大方向に向かっているとか。

以前、ハンスの街を脅かした魔獣の技術が急速に進み、既に実戦配備されているとか。

普通、敗戦国というのは、暫くは大人しくしているものである。

にもかかわらず、これだけあれこれと動いているとなれば、下手をすると、またぞろ戦争などということにもなりかねない。

そうなった場合、損をするのはハンスの国と戦力のある隣国なのは明らかではなはずだが。

「案外、ハンス様が隣国との国境近くに居るから、そういうことを呼び寄せているのかもしれない」

「ほんつとうに。勘弁してくれ」

苦虫でも噛み潰したような顔で弱りきった声を出すハンスに、レインは肩を竦める。

普段通りの無表情だったが、付き合いの長いハンスにだけは、僅かに楽しげであることが見て取れる。ハンスはそれを見て、疲れたようにがっくりと項垂れたのだった。

さて――。

今回派遣された視察官は、ハンスも顔を知っている人物であった。
セプエル・ブラハン。

ロックハンマー侯爵が持つ軍の兵士で、百人長という地位に居る人物である。
ゴーレムを作り、土や石などを操る魔法の使い手だ。

少し言葉を交わした機会もある。快活で気持ちのいい男だった。気取ったところがなく、泥臭いとも言える印象をハンスは記憶していた。

「いや、お待たせして申し訳ない！」

宿泊用にあてがわれた部屋から、セプエルは小走りで慌てたように出て来た。

手には書類束と、筆記用具が抱えられている。いかにも戦場の似合う兵士といった大柄なセプエルが文官のようにそれを持っている様子は、どうにも不釣り合いに見えた。

申し訳なさそうに言うセプエルに、ハンスは笑いながら首を振る。

「まだ余裕もありますから、焦らなくても構いませんよ」

「書類仕事というのは、どうにも苦手ですてな！ 視察のチェック項目を確認しておりましたら、すつかり遅くなつてしまいました」

「セプエル殿ですか。私も机の前に座っているのが苦手ですて。それならば教練のときに習った

ようなことで身体を動かしている方が、ずいぶん気が安らぐ性質なのですよ」

「然り！ ハンス殿ですか！ 私が教練を終えたのはずいぶん昔ですが、教官にどやされたのは未だに覚えておりますよ！ そう、曰く」

「死なないように、死ぬ気で体力をつけろ」

異口同音にそう言うと、ハンスとセプエルはお互い大きな声を出して笑った。

この手の会話は、兵士の間では定番のやり取りだ。
同じ苦勞を味わった者同士だと確認し合うことで、絆を深める意味がある。

顔を合わせて早々、あたかも一緒に心中するような作戦に組み込まれるかもしれないのが、兵や騎士というもの。初見でもこうしてバカ話で盛り上がり、息を合わせるのもまた「戦商売」なのだ。そういった意味で、この二人は今、恐ろしく戦場臭い会話を交わしていることになる。

二人がひとしきり笑い終えると、レインがハンスへ声をかけた。

「ハンス様、そろそろ」

「ああ、そうだな。セプエル殿、ご案内します。こちらへ」

ハンスは先頭に立って歩き始めた。向かうのは、イツカのダンジョンの出入口だ。

従業員寮を出て街の方へ続く道に進んで行くと、すぐに大きく開けた平らな土地が現れる。

山間にあるにもかかわらず、四角く整地されたそこには、無数の巨大な人型が立ち並んでいた。隅の方には、木を組み合わせた箱舟のような物体も置かれている。

そこは、イツカがゴーレムを作り、保管しておくための場所なのだ。立ち並んでいるのは、どれも完成品か、試作段階のゴーレムである。

自身もゴーレムを使うためか、セプエルは興味深そうに幾つもの巨体を眺めた。

「いやいや、ここに来たときも拝見しましたが、人の手が入っているだけあって見栄えがいい！ 正に質の良い鎧の如くですな」

立ち止まったセプエルが、一体のゴーレムを見上げて感嘆を漏らした。

全身鎧を纏っているような、身の丈五メートルを超える巨人。

その迫力たるや、かなりのものだ。

見慣れない異国風の外見もあり、セプエルを唸らせる。

ただ、実は日本人の転生者であるレインは、別の感想を持っていた。

(ロボっぽい。それも、リアル系の)

そう、キョウジとイツカがデザインに参加したゴーレムの外見は、どこまでも日本のアニメに登場するロボットっぽいものだったのだ。

確かに唸るような外見だろう。

日本が何十年もかけて作り上げたサブカルチャーの一端なのだから。

一人、生暖かい気持ちになっているレインをよそに、ハンスとセプエルはしきりに感心した様子である。

「ゴーレムにも驚きますが、あの鳥カゴにも度肝を抜かれました」

「ああ。確かに私も最初は肝が冷えましたよ」

今回セプエルは、ロックハンマー侯爵領から鳥カゴに乗って移動して来ていた。

馬を使っても五日はかかる移動を、鳥型の魔獣が運ぶ鳥カゴならば一日もかからない。キョウジの発案で作られたそれは、この世界では画期的な移動手段であった。

今は改良を重ねている段階であり、将来的にはロックハンマー侯爵領主館とこの街の間で定期便を飛ばす計画もある。ムツキの監視のために兵士が往来しなければいけない事情もあり、かなり前向きに検討されているようだ。

ロックハンマー侯爵という人物は、新しいものを取り入れることに躊躇のない性格であった。

「はっはっは！ 自分は高いところが好きでしてな。なかなか楽しい経験をさせていただきました！」

鳥カゴにはガラス窓が取り付けられているため、外の風景が見られる。

確かに高いところが得意ならば、貴重な経験だろう。

「来るときも上からこの場所を眺めましたがいやあ、壮観でした」

鳥カゴの発着場があるこの場所を、セプエルは上空からじつくりと眺めていた。

石材や鉄でできたゴーレムが並ぶ様子を上空から目すれば、確かに迫力がある。

「並んでいるだけでも圧巻ですからね。これが動き出すとまた威圧感が違いますよ」

「それはそれは！ 一度は見てみたいものですな！」

ゴーレムの前から離れ、三人は再び歩き出した。

敷地の中央付近に近づくと、地面の上に何かが描かれているのが分かる。

その周囲にだけはゴーレムも置かれていない。意図的に空けられているようだ。

地面には白い石灰のようなもので円が描かれ、中央には「鳥」という漢字が書かれている。

それは、鳥カゴ用の発着場だった。セブエルが降り立ったのも、この場所である。

「ここから、ダンジョンに降ります」

ハンスの言葉に、セブエルは怪訝そうに首を傾げた。

「はて、たしか件のイツカ殿の能力で作られたダンジョンというのは、地下にあるのでしたな。そこへ降りられるような穴は見当たりませんが。何か仕掛けがあるのでしようなあ」

一体、何が起ころのかいかにも楽しみだといった様子で、にっかりと笑う。

そんなセブエルの顔を見て、ハンスは苦笑する。

「そういうのは思っても言わぬが花ではありませんか？ 驚いて見せるのも度量でしょう」

「おお！ 確かに！ これはこれは、育ちの悪さが出てしまいましたな！」

「いやいや、ご推察お見事」

セブエルの声を掻き消すような大きな声が、地面から響いた。

正確に言うなら、円と鳥の文字があつた場所だ。

目を見張るセブエルの前で、それは僅かな地響きを上げながら動き出した。

地面に描かれた円と鳥のマークが、地面ごと持ち上がり始めたのだ。

円と鳥の文字は真つ二つに割れ、その下から巨大な柱に似たものが見えた。

それが指であり、二つに割れた円が、まるで盾のように巨大な腕にくくりつけられたものだと分かる頃には、巨大な人型の全身が三人の前に現れていた。岩や鉄を組み合わせて作られたその異形が立ち上がった足元には、下へ続く穴と階段があつた。

階段には、下から上がって来る人の姿が見て取れる。

スーツに身を包み、にこやかな笑顔を浮かべるイツカだった。

「普段は腕をすこおし上げて、その間から中に入るんですけどね？ 今回は視察官さんがいらつしやるということで、ちょっとパフォーマンスを」

足の前から頭の上まで、軽く十メートルは超えているだろう。

イツカはその足元に立ち、ゴーレムをペチペチと叩く。

「コレは出入口兼見張り番のゴーレム。守屋守くん一号です。ゆるきやらつぼくはないけど、よろしくどぞー」

お手本のような営業スマイルを浮かべ、イツカは恭しくお辞儀をした。

妙に芝居がかったその態度に、ハンスは嫌な表情を浮かべ、セブエルは面白そうに唸る。

「はっはっは！ コレは驚いた！ 噂には聞いていましたが、実物を前にすると血が滾りますな！」

「あっはははあー。まあ、いつでもコレが一番の目玉なんですけれどもね？ うちで一番の大仕掛

け、コレなんで。出オチってやつですよ」

苦笑しながら、イツカはゴーレムの足元を離れ、セプエルの前に立った。

セプエルもそれを迎え入れ、お互いに礼をする。

「セプエル・ブラハン様。ようこそお越しくださいました。能力を使ってこの牧場で働いておりま
す、スヤマ・イツカと申します。担当は地下に広がる不思議空間の維持と設営管理。まあ、要する
に全部ですねー」

「歓迎、痛み入ります。自分はセプエル・ブラハン百人長。今回、貴女のダンジョンを視察するこ
とになった者です。とはいえ、おおよそは書面でご説明いただいておりますからな！ 自分はただ
見学をしに来た、いってみれば形だけの確認なのですよ！」

「それはそれで怖いですねえ。なにせ私パンピーですから。お役所の書類仕事って、どーもアレで！
なんならハンスさんにぶん投げちゃおうかと思っただんですけど、それやっちゃうとレインさんにし
こたま怒られそうだったもんでえー！」

イツカの顔が若干引きつっているのは、レインに凝視ぎょうしされているからだろう。

無表情なので感情は読み取れないが、背中から発散されるオーラが大変な事態になっている。

ことハンスが絡んだ場合、レインは凄まじい力を発揮するのだ。

触らぬ神に祟たたりなし、である。

「ま、それでも内容はきっちり揃えてるはずなんで。どうぞご存分にご確認ください」

「ええ、そうさせていただきますしよー！」

「あ、それと」

思い出したというように、イツカはぼんと手を叩いた。

「先ほども言いましたけど、私ゴクゴクありふれた一般家庭の出なもんで。こちらのしきたりとか
流儀とか知らないんですけど、何か失礼なことあったら教えてくださいな？」

一応、セプエルはロックハンマー侯爵の指示を受けてこの場に来ている。

その人物に対して非礼があれば、つまりロックハンマー侯爵に無礼を働いたことになってしま
う。普通ならば、礼を失しないように礼儀作法に詳しい人物を案内役に立てるところなのだが、今回
はそうもいかない。なにしろ、イツカのダンジョンマスターとしての能力は特殊すぎて、その全貌
を正確に説明できるのはイツカ本人とキョウジしかいないのだ。ダンジョンを製作するだけでなく、
長期間にわたってそれを維持しながらゴーレムなどの無生物に様々な機能を付与できるイツカの能
力。下手な説明をすれば、国にどう受け取られるか分かったものではない。

そのため彼女の後見としてハンスとレインが居るわけだが、それでもサポートしきれるとは限らない。
だが、イツカのそんな心配は、セプエルの笑いで吹き飛ばされた。

「なに、心配は無用です！ こちらとしても貴女方のご事情は把握しておりますからな！ 礼儀な
ど気になる必要はありません！ それに、実は私は農家の出でしてな！ 魔法を見込まれて兵士に
なった口ですので、私もずいぶんと礼儀を知らんです！」

「あー、そうなんですかー！ そりゃー、では、お言葉に甘えさせていただくということで、ひとつよしなにお願いますー」

快活な笑い声を響かせるセプエルに、イツカはぺこぺこ頭を下げる。

なんともこなれたその動きは、日本人特有の「OJIGI」だった。

挨拶を終えたところで、イツカは下へ降りる階段の方に足を向けた。

「では、早速ご案内します。ハンスさんもレインさんも、楽しみにしてくださいねん」

「ん？ 俺達もか？」

突然名指しされて、ハンスは首を傾げる。

イツカはニヤリと笑顔を作り、何故かVサインをして見せた。

「だって、私の能力がレベル2になってから初めてじゃないですかあー。ダンジョン入るの」

異世界にやって来た当初から日本人達の特殊能力はとてつもなくだったが、実は最近になってさらに強化されているらしい。

「レベル2」と呼ばれる状態を最初に経験したのは、ケンイチだ。

魔獣使いのケンイチには「魔獣と対しているときだけ超人的な力を発揮できる」という能力があった。だが、レベル2になり、「常時超人的な能力を發揮できる」ようになったのだ。

さらにケンイチに次いで、キョウジとイツカも「レベル2」へアップしていた。

「おっこのしみにいー」

「無茶はしていないだろうな」

意味ありげにニヤつくイツカに、ハンスは表情を引きつらせた。

一応どんなものを作り、設置したのかは、新しいものが出来上がるたびに書類で報告されている。だが、見ると聞くとは大違いというやつだ。どうせ視察するのだから、そのときに一緒に確認すればいいとハンスは考えていた。だが、それは間違いだったかもしれない。

それを察してか、それとも何も考えていないのか。

イツカは至極楽しそうな足取りで階段の前まで歩いて行き、くるりと振り返った。

「さき、どうぞ。私のダンジョンへ。って、一回言ってみたかったですよねー」

妙にニヤつきながら言うイツカに、ハンスは底知れぬ不安感を覚える。

いっそのまま帰ってしまいたいとは思うものの、当然そんなわけにもいかない。

ハンスは諦めたように溜め息を吐き、わくわくとした表情のセプエルの後についてダンジョンに入って行った。

2 視察をする男

ダンジョン内の通路は広く、屋根もかなり高く作られていた。



壁面や床は何か強い力で圧縮されたように平らにならされており、滑らかなだ。

天井近くには光の球らしきものが飛び交い、それが通路内を明るく照らしている。

セブエルは驚いて、その光の球に目を凝らした。

よくよく見れば、光の中心に虫のような羽の生えた小さな人型のものが居るのが分かる。

「これは、妖精ですか！ 魔力の多いところに集まると聞いていましたが」

「私のダンジョンは、通路とか壁面に魔力を蓄えてましてね。妖精達に言わせると魔石鉱山と似た環境らしいんですよ」

既に見慣れているハンスとレインも、改めて感心した表情で妖精達を見上げている。

「最初は溜め込んだ魔力を掠め取っているのかと思ったんですが、どうもそういうことじゃないらしくてですね」

「ほお。魔力が集まるが、魔力を使っているわけではない。ということですかね？」

「みたいですね。連中にとつての魔力は、魚にとつての水、みたいなものですよ。消費するわけじゃないけど、生きていくのに必要なもの、みたいな」

イツカの持ち出したたとえに、セブエルは納得した様子で頷く。

「私達にとつての空気、のようなものですか。しかし、それ以外の場所でも妖精は見かけますな」

「当人達によれば、一日二日なら離れていられるそうです。それ以上になると、苦しくなって存在が保てなくなるんだとか」

「なるほど。数日ならば大丈夫だと。ずいぶん丈夫なものですね」

セプエルは唸りながら腕を組んだ。そして、今度はふと壁面の方に眼を向ける。その傍に寄り手を這わせると、感心しつつ顔を近づけた。

「よく固めてありますな。かなり強い力で固めたようですが」

「ダンジョン内の整備や、建築、建設専用のゴーレムが居ましてね。彼らにやってもらってます。こういう仕事だけなら、人間よりよっぽど上手いですよ」

「そのために作ったゴーレムならば、人よりも優れているというのも頷けますな」

豪快に笑いながら、セプエルはしゃがみ込んで床面にも手を這わせる。

まるで石畳のようになり硬く固められていた。表面は土色で、直接手で擦ると、さらさらと僅かずつ削れてくる。壁面と同じく、土を固めて作ってあるのだろう。

「ただ掘って固めた、というわけではなさそうですね。どこから土を持ち込み、表面を加工したように見受けれますが」

「お、分かります？ 近くの山にキメの細かい良い土が出るところがありましてね。そこから拝借して表面だけ固めます。見た目だけじゃなく、そうすると頑丈になるみたいでして。ここはゴーレムも通りますから。頑丈な方が良いでしょう」

「広さと高さがあるのはそのためですか」

納得した様子で、セプエルは頷いている。

イツカはそんな彼を促し、奥へ進んでいく。

「まずご案内するのは、ゴーレムのコア保管庫です」

「資料を拝見しましたが、イツカ殿が作るゴーレムの心臓部になるものだそうですね」

「そうですね。セプエルさんのゴーレムには、要らないんですよ。こちらやましーなあー」

「はっはっは！ 確かにそういったものは要りませんな！ しかし、通常一人が制御できるゴーレムは数体が限度。私など、一体だけですからなあー！」

セプエルが言うように、複数のゴーレムを同時に制御できる魔法使いは少なかった。

火を起こしたり、矢を出したりといった、いわゆる飛び道具的な魔法は、一度発生させてしまえばそれだけで魔力の消費は終わる。

それに対し、ゴーレムのように形状の維持が必要な魔法は、魔力を継続して消費し続けなければならぬ。そのため、一般的な遠距離攻撃魔法よりも、ゴーレムを操る魔法は高度、且つ、消耗が激しいとされている。術者にもよるが、軍人でもない限り一日三時間から四時間が関の山だ。

長いと感じるかもしれないが、多くの場合、ゴーレムの使用目的は日本で言うところの重機や車両に相当する。したがって、三時間から四時間にわたって使用されるのは普通なのだ。

「確かにそういう意味では、便利かもしれませんねえー。ただ、その分下準備が大変でして。その一つが、コアなんですけれども」

そんな話をしているうちに、目的地に着いたらしい。

廊下に面した横開きの扉の前に立ち、イツカはひらひらと手を振る。すると、扉が独りでに横へスライドした。

イツカは扉が開ききるのを確認もせず後ろへ振り返り、視線を上げる。ちよいちよいっと小さく指を動かすと、数匹の妖精がそれに気がつき、扉の中へ入っていく。

一連の流れを見ていたセブエルは、「ほお！」と声を上げた。

「その扉もゴーレムですか！」

「です。妖精さん達を呼んだのは、まだ中が薄暗かったもんで。さあ、どうぞこちらへ」
イツカに促され、セブエルは扉を潜る。

そのすぐ後ろから、ハンスとレインも続く。

部屋は、実に殺風景な作りになっていた。家具などは設置されておらず、壁と床、天井だけの四角い部屋だ。内部は学校の教室よりも僅かに広いほどだろうか。天井までの高さは、廊下と同じ程度だ。入口の扉の丁度正面の壁にまた奥へ続く扉が付いており、その左右には二体ずつ、合計四体の金属甲冑が見張り兵のように佇んでいる。

「この部屋は、コア保管庫の前室です。運搬を担当するゴーレムは保管庫内には入れないことにしている、ここで受け渡しなどを行います」

「そして、警備のゴーレムを常駐させておく場所でもあるわけですか？」
セブエルの質問に、イツカは笑いながら頷く。

四体の金属甲冑を、セブエルはゴーレムだと判断したようだ。もちろん、それは正しい認識である。「廊下に立たせておくのも邪魔ですしね。このゴーレム達の目はジャビコにも繋がっていますから、監視も楽ですし」

ジャビコというのは、真っ黒なボーリング玉に似たイツカの能力を管理する外部記憶装置で、いわばコンピュータのような存在だ。

「視覚を共有、ですか。それは恐ろしいですな！」

居並ぶゴーレムの横を通り、イツカは一番奥の扉を開ける。

その内部は、金属柵の並ぶ、広大な空間であった。

天井までの高さこそほかと変わらないものの、広さは段違いだ。

「ここが、コア保管庫です。といっても実際は材料の保管、組み立てなどもここで行っていますので、正確にはコア研究室、ってところですかね？」

「となると、ここに載っているのはすべてコアの材料や、コアそのものですか。拝見しても？」

「もちろん、どうぞどうぞ」

セブエルは柵の一つに近づいて、並べられた品に目を落とす。

木材、骨、石材、そのほか得体の知れない塊が、無節操に並んでいる。

ざっと見渡す限り、ほぼすべての柵に何かしらの品が載せられていた。

「これらすべてコアの材料なのですか」

「魔力の通しがよければ、なんでも材料になるもので。あ、肉とか血とかのナマモノ系以外の生体は無理なんですけどもね？ 木材とか骨とかなら大丈夫みたいなんですけど。基準は私にもよく分かりません」

「はっはっは！ なるほどなるほど！」

豪快に笑うセブエルに、イツカは苦笑しながら頭を掻いた。

「コア本体をご覧に入れますよう。奥になります、どうぞこちらへ」

仕草と言葉で奥へ促しながら、イツカは先頭に立って歩き始めた。

その間に、まるでガイドのように材料について説明する。

「これらの材料は、ケンイチさんところの魔獣さん達や、ゴプリンさん達自衛隊、うちのゴーレムなんかが収集してきます。何が使えるか分からないんで、結構手当たり次第に収集してもらってます」言葉通りなのだろう。左右の柵を見れば、並んでいる物の共通点のなさが分かる。

何かの金属片や紙屑かみくずのようなもの、粉こなっぽい何かの塊。結晶のような鉱物に加え、薬品のように白い粉など。

「本当に、いろいろなものがありますな」

「あははは。確認しないと何が使えるか分からないもんですから、はい」

イツカが笑い声を上げていると、前方の柵の陰から何かが見れるのが見えた。

足音から何か接近していることには気がついていたらしく、セブエルを含め誰の顔にも驚きの

色はない。

それは、金属製の全身鎧だった。

先ほど扉の前で並んでいたゴーレムと同じものが、歩いているのだ。

「おお！ これはこれは！」

「コア保管庫内部は、常に四体のゴーレムが警備に当たっています。まあ、ここで暴れたら困るんで、念のためいるって程度でしかないんですが。外に並んでいるゴーレムと、日に三回、入れ替わります」

「交代制ということですか」

「そうです。まあ、ゴーレムなんて本来そういうのは要らないんですけど。気分ですわね」

生物ではないゴーレムには、休憩も気分転換も必要ない。

不必要な行動だけに、本当にイツカの気分の問題なのだろう。

日本警察風の敬礼をして去っていくゴーレムを見送り、一同は再び歩き始める。

「ちなみに、イツカ殿。換気かんきなどはどうしておいでなのですか？ こういう場所では必須だと思えますが」

「外から空気を取り込むものと、外へ送り出すもの。その二つの換気ダクトを張り巡らせてあります。これは極小ごくこさなもので、妖精さん達の通り道にもなっています」

妖精は掌てのひらサイズで、それが通れる程度ならば、ダクトの大きさは高たかが知れているだろう。

なるほどと頷くセブエルに、イツカは説明を続けた。

「それなら人は侵入できないですし、入って来たとしても虫や小動物でしょうからね。一応そういったものを駆除するために、小型のゴーレムを徘徊させています」

「その小型ゴーレムも監視の目の一つ、ということですか？ なかなか嚴重な警備ですな！」

「いやあー、ビビリなもんで」

「しかし、排気に、照明の維持。施設建設から、防衛警備。なるほど、イツカ殿の能力は正に拠点を作るものなのですな」

いたく感心しているセブエルに、イツカは困ったような苦笑を浮かべる。

確かに、かなり気合いの入った設備だ。妖精の通り道を確保した換気システムなども、細かく配慮が行き届いている。が、どれ一つとして、イツカが考えたものではなかった。

では誰が？ といえば、当然一人しかない。キョウジである。

この場所にダンジョンを作ると決めたのも、資材を集めたのも、設計立案をして図面を引いたのも、それらを現職の大工に見せて協力を仰いだのも、すべてキョウジがやったことなのだ。

イツカがしたことといえば、必死になって頭を悩ませているキョウジの横で、酒をかつくらつていた程度である。

「私は、ほっとんど何もしてないんすけどねえー」

「はっはっは！ ご謙遜ですな！」

正に言葉通りなのだが、目の前の設備を見せつけられてそう受け取る人は居ないだろう。

実情を知っているハンスは、じつとりとした視線をイツカに向けているが、特に何か言うつもりはないようだ。

「さ、着きました。この辺りの柵に置いてあるのがコアです。で、そこが作業机ですな」

イツカはセブエル達を振り返り、左右に手を広げた。

背の高い柵が取り払われたそこには、中央に大きな作業台が置かれている。

部屋が一番奥にあるらしく、壁に作り付けの柵が見えた。柵に四方を囲まれた、不思議な空間だ。

その柵には、様々な形状のケースが並んでいる。

鳥かごに似た網で作られた金属ケースから、壺状の焼き物まで。サイズもまちまちで、それぞれに統一感はない。一応、同じ形状のものは、まとめて同じ柵に収納されてはいる。だが、隣り合ったものの材質はまったく別物であり、種類別に分けるなどの気配りをしている様子は見受けられなかった。

「通って来た柵にあったような材料を、用途に合わせたケースに入れ、コアが出来上がります」

手近な柵から、壺のようなコアを取り出す。

蓋と壺状の本体を繋いでいる金具を外し、イツカはその内容物を作業机の上に広げた。

転がり出たのは、鉱物の天然結晶と思しきものと、木片、そして、幾らかの骨片だ。

「基本的に、コアの内部には複数の素材を使います。なんか、最近になっていろいろ試してみたら、そっちの方が性能がよくなるみたいで。どんな組み合わせがいいかは、まだ実験中って感じなんで

すけどね」

「素材の組み合わせ、というわけですな。となると、それだけでも何万通り。分量も関係あるとすれば、気が遠くなりそうですね！」

「といっても、組み合わせの方向性はジャビコがおおよそ分かっていますし。実際に作らなくても、シミュレーションはできますから」

イツカの言葉に、セブエルは感嘆し、質問を重ねる。

「ほお、実際に組み合わせずに推測できるのですか。便利なものですね！ それは今、どこに？」

「管理室に置いてきました。あれはあれで、いろいろ仕事があるもんで。私よりも忙しいんですよ」ジャビコの存在は、書類にもきちんと明記してあった。

セブエルも、それがどういうものなのか理解しているようだ。

「このコアですが、メインはあくまで中身の方です。ケースの材質は性能に直接影響しません。ただ、ゴーレムの運用用途によって、変えています」

「ほう！ たとえば、どのような？」

「建設、建築の場合は、鳥かご型などの金属の網目状あみめじょうのものを使います。ゴーレムの体内にあるため、直接危険にさらされる恐れが少ないので、それがことが済むんですよ。全部金属にすると重いですし。戦闘用のゴーレムは、頑丈な金属の箱を使います。こちらは装甲が破損はそんした場合でも、コア自体を守るようにですね」

説明しながら、イツカはそれぞれのコアを柵から運び出し、作業机の上に並べていく。

様々なものが詰まった鳥かごや無骨むこつで頑丈そうな金属の箱などだ。

「箱状の方は、確かに重そうですね」

「鳥かごの三、四倍じゃ利かないもので。戦闘用のガッチリしたやつにしか使わないことにしています。値段的なことも含めて」

指で輪を作るイツカを見て、セブエルは思わず噴き出す。

金がかかるのであれば、確かにそちらも気にしなければならぬだろう。

「で、こっちの焼き物系は水に強いですから湿気の強い場所だったり使います。強度は落ちますが、さびてしまったら困りますからね」

「そういったところにまで気を遣われるのですか！ 私達の魔法ではそういったところは気にしませんからね!!」

「下準備は大変ですが、まあ、セブエルさんの言ったように数を揃えられるのが強みですね」

イツカのゴーレムは、活動可能時間がとても長い。

種類や使用状況によっても異なるが、長くて一カ月、短くても二週間は無補給で連続稼動かぞうが可能だ。その後についても、ダンジョン内であればすぐさま魔力の補給ができる。

手間や準備は必要だが、それを補って余りある効果が期待できるのが、イツカの能力なのだ。

「ここで作ったコアは、外のゴーレム置き場でボディと組み合わせ、ゴーレムとして完成させませ

す。最近はおボディは外注^{がいちゅう}することが多いもんで、中に運び込む手間を省^{はぶ}いてるんですよ」「外注というと、鍛冶師や石工に頼^{たの}まれているのですかね?」

「です。プロに頼^{たの}んだ方が成型が確かですし。なにしろでかいゴーレムもありますから」外に並んでいたゴーレムの中には、高さ五メートルを超えるものもざらにあった。

ダンジョン内の天井までの高さはおおよそ三メートルなので、中での組み立ては確かに難しいだろう。ちなみに、先ほどすれ違った鎧のゴーレムは、高さ二メートルほどだ。

「ううむ。なんとも金のかかる話ですなあ」

「あつはつはつは。そこだけはまあ、こだわり始めるとそうなっちゃいますよね」セプエルの言葉に、イツカは顔を引きつらせる。

実際、ゴーレムのボディには金がかかっていた。外注すれば、かなりの金額になるだろう。もつとも、それは普通に注文すれば、であるが。

「ゴーレムを貸し出す代わりにゴーレムのボディを作ってもらう、つてこともあるんですよ。材料はこつちで集めてますし、加工だけお願いする形で」

「なるほどなるほど。森や山の中で材料になるものを見つけさえすれば、力仕事はそれこそゴーレムの出番ですからな!」

笑いながら、セプエルは手に持った書類にすばやくメモを書き込んだ。

おそらく、何かしらの評価だろう。ここに来るまでで、初めての行動だ。

一瞬、凍りつくイツカだったが、セプエルがすぐに書類から顔を離したことで胸を撫で下ろす。

「で、では、次の場所に行きましょうか。今日のメインになる場所で、私に追加された三つの機能すべてを使っている、最重要施設です」

「ムツキ殿の収容施設、ですかな?」

イツカはニヤリと、口の端^{はし}を吊り上げた。三日月形の口元が、妙に板についている。

「ご明察^{めいさつ}です。では、ご案内します」

そう言うと、イツカは再び前に立ち、歩き始めた。

やって来たのは、コア保管庫の前室と同じ、四角いだけの部屋であった。

ただ、奥には扉もなく、ゴーレムも一体しか置かれていない。

全長は二・五メートルほど。蛙^{かえる}をモチーフにした頭部を持つ、金属と石材のゴーレムだ。

人と変わらない二本腕二本脚ではあるが、その体格は異様なまでに立派だった。

腕は膝より下まで伸び、すこぶる太い。指は金属製の鉤爪^{かぎづめ}で、とても頑丈そうだ。

「これは実験用の試作、ゴーレムで、キョウジくん命名「ヴォジャノイ」です。いろいろと機能を詰め込んだ、高性能試験機つてやつですかね。これが、今の収容施設の門番代わりです」

「ほお! 試作機、ですか! それは興味深い!」

興味深げに覗き込むセプエルを見て、イツカはニヤリと笑う。それからヴォジャノイと呼んだ

ゴーレムの隣に立ち、その表面をペチペチと叩いた。

「コイツに仕込んだ機能の一つが、私の新しい能力です。トラップなので、コイツ、というか、コイツの着ている鎧に仕込んだもの、って言うのが正確なんですけどね」

「鎧ですか？ 確かトラップ、というのは、床などに仕掛けるものでしたな」

「そうです。ただ私の場合、罠のようなものだけでなく魔力を消費して、魔法的な現象を起こさせるものすべてがそれに相当します。それなりの面積のある場所に設置して発動します」

そう言うと、イツカはヴォジャノイの腹の部分を叩いた。すると、その部分にうっすらと円形の光の線が浮かび上がる。

「コイツの腹には、爆発する火球を飛ばすトラップ」が仕込んであります。一発撃つと魔法陣どころか、ゴーレムに付与した魔力もごっそり使っちゃうんで、すぐエネルギー切れになるんです、が」

「先ほど言っていましたな。ダンジョンの中ならば、すぐに補給ができる」

「えくせれんと！ そのとおりです。ダンジョン内に居る限り、コイツは「爆発する火球」を飛ばせる魔法使いさんと、同じ働きができる。ただ、魔力消費が激しいんで、やりたくはないですけどね」

肩を竦めて、イツカは自嘲気味に笑う。

イツカのダンジョンは、内部で生物を殺すことで、魔力を蓄えることができた。逆に言えば、基本的にはそれ以外で魔力の回復ができないのだ。

大型の魔獣を絞めるための場所をダンジョン化することによって、魔力が確保できるようになり

はした。大型の魔獣から得られる魔力は膨大なものになる。

とはいえ、魔力は様々な用途を持つ、ダンジョンの基礎になるエネルギーだ。

節約できるなら、それが一番なのだ。

「で、それと同じ流れで、本来地面に設置するような新機能の一つを、コイツに仕込んだわけです。まあ、地味なんですけど……ジャビコ、返事よろしく」

「了解しました。初めまして、セプエル・ブラハン百人長。私は、ダンジョンマスターを補佐する外部能力装置、ジャビコです」

その声の元は、ヴォジャノイであった。正確に言うなら、ヴォジャノイの頭部だ。

驚いた表情のセプエルに、イツカはドヤ顔を向ける。

「今までゴーレムの目を通して映像を確認できたんですが、音声をやり取りできませんでした。それが、新しくゲットした能力で可能になったんですよ。壁とかに、直径二十センチ程度の円形を描くと、それを通して通信ができるんです。ただ、ダンジョン内だけに限りますが」

「なんと！ ダンジョン内なら通信が可能ですよ！」

大きく頷いているイツカに、セプエルは唸りながら腕組みをする。

この世界には、情報通信として「遠話」という魔法能力があった。軍人であるセプエルは、こういったものの重要さ、恐ろしさを身に染みて知っているのだ。

「確か、入り口のゴーレム置き場も、ダンジョン内と認識されるのでしたな」

「はい。ついでに、施設を含め牧場全体と、コウシロウさんの店とかハンスさんの駐在所とか、街の一部もダンジョンにしてあります」

イツカのダンジョンは、敵を誘い込み内部で倒すことを目的とするものだ。

事情を知るセブエルには、その恐ろしさがよく理解できた。たとえば魔石採掘現場のように魔力が濃い場所では、「遠話」や「千里眼」などといった能力が阻害される傾向にある。コウシロウ並の余程の使い手でもない限り、イツカのダンジョンの中では「遠話」も「千里眼」も使えない。

つまり、敵にハンディキャップを背負わせた上で、イツカはダンジョン内部を見渡せ、距離を置いての通話も可能なのだ。有利、などというレベルではない。

「もし城塞都市のような場所をイツカ殿が手に入れば、それを奪うのは相当に難しくなるでしょうな」その言葉に、イツカはぎよつとした顔になる。慌てた様子で、両手と顔を横に振りまくった。

「いやいやいや！ 私は天下国家に桶突くつもりなんて微塵もないですよ!? そりやもう、法の下僕！ 三回まわってワンとか鳴いちゃうレベルで！ はい！」

「はっはっは！ もののたえです！ まさかそのようなことを疑ってなどおりませんとも！」

「あ、あははは！ もう、心臓に悪いなあ……！」

豪快に笑うセブエルに釣られ、イツカも引きつった笑いを浮かべた。

これほどの能力者であり、決断力もありながら、イツカは基本的にはビビりだ。

やらなければならないことを呑み込むのも早い、折れるのもすこぶる速い。

だからこの世界に最初に来たときは、すぐに腹をくくってダンジョンを作った。なんやかんやあって、ハンス達にダンジョンを破壊されたときは、すぐに降伏した。

イツカは咳払いをすると、気を取り直して言葉を続ける。

「えー、さて。最近追加されたもう一つの機能をご紹介します」

イツカは指をパチリと鳴らした。すると、部屋の床面全体が淡く光り始める。

セブエルは、驚いて目を丸くした。

ハンスとレインは既に見慣れているのか、特に表情は変わらない。

「こちらも、まずは体験していただきますかね。すこし浮遊感がありますが、あしからず」

次の瞬間、セブエルは体がふわりと浮き上がる感覚を覚えた。重力から切り離されたような違和感が走り、同時に地面が強く発光する。

すぐにその浮遊感が消え、光が収まると、セブエルは細めていた目を薄らと開いていく。視力が戻って来て、周囲の様子が一変していることが分かる。

左右と背後を取り囲むように起立する無数のゴーレム。

目の前の壁には、大きな扉が嵌まつていた。

「おお、これは！」

「瞬間移動。ダンジョン内のある地点とある地点を、障害物も関係なく一瞬で移動することができます。トラップの一種ですね」

地球のRPGなどでは、定番の罠だろう。突然、見知らぬところに飛ばされるこの種の罠は、凶悪極まりないものの一つだ。とはいえ実際に起こる現象としては、信じがたい。

セブエルもこれには流石に度肝を抜かれたらしく、目を丸く見開いて固まっていた。

「これは。流石に驚きましたな」

イツカは満足そうに頷く。

「ただ、幾つか欠点もありましてね？ まず、先ほどの光の上にかなり長い間居てもらわないと、瞬間移動の対象になりません。そして、移動先にも同じ仕掛け、つまり同じ広さが確保できないといけません。さらにその場所はダンジョン内ではなくてはならず、密室であってはならない」

「つまり、相手を一瞬にして閉じ込めるようなことはできない、ということですか？」

「当たり前。そのとおりです」

「なるほど。とはいえこれは。移動手段としては破格ですな」

セブエルの言うとおりで。多少時間がかかるとはいえ、ダンジョンの端から端まで歩くことを考えれば、どうということもない。

何よりイツカのダンジョンの範囲は広大であり、牧場はもちろん、街の一部にまで及んでいる。

「ただ、その分、消費魔力も破格ですね？ 普通の罠を発動させる場合の十倍近く必要なんですよ。で、それを一回発動させる魔力は、ゴーレムを一体作るのと同じなんです。つまり、一人移動させるのに十体分の魔力が必要なわけです」

「ということは、今我々四人が移動したことで、ゴーレム四十体分の魔力を？」

「そういうことですな」

イツカは苦笑いをしながら、頭を掻いた。

確かにセブエルが受け取った資料には、そう書かれていた。

「なるほど。それは確かに破格ですな」

「なんですよねえー。一人ずつに魔力が必要っていうのがネックなんですよねえー。一回でまとめて運べれば、便利なんですけど」

苦笑いをしていたイツカだったが、咳払いをして姿勢を正す。

そして扉の前に立ち、再びパチリと指を鳴らした。

「さて、では、ムツキちゃんを閉じ込めているブロックへご案内しましょう」
開いていく扉の前に立つイツカに促され、セブエル達はその扉を潜った。

3 捕まっている女

無骨な鉄格子に、セメントを塗り固めたような壁。

白くて清潔感はあるものの、いかにも堅牢な牢獄だ。